

岩 脇 三 良  
いわ き さぶ ろう

学 位 の 種 類 文 学 博 士

学 位 記 番 号 文 第 2 3 号

学位授与年月日 昭和 4 7 年 3 月 2 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

学位論文題目 心理検査における回答の心理

論文審査委員 (主査)

教授 北 村 晴 朗

教授 細 谷 貞 雄

教授 田 代 不二男

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 1 : 目 的

心理学の研究においてしばしば使用される測定道具のひとつに心理検査がある。科学的に未発達な段階にある心理学の知識と理論を背景にして開発された心理検査は、物理測定具と異なり、かず多くの欠陥をもっている。そのような測定道具であるのにもかかわらず、心理検査は心理学の研究室にとどまらず、われわれの日常生活に浸透し、学校をはじめ、産業界、官庁、臨床場面などにおいて広く使用され、検査結果によつてなんらかの意思決定がなされている。

検査使用者の多くが検査を施行する場合、検査を行なえば、なんらかの得点が得られ、数値となって表現されるので、いかにも客観的で科学的の道具を使用しているような錯覚におちいりやすい。心理検査で測定される対象は単なるものではなく、複雑な感情や意味や動機をもった人間であることが、とかく忘れられやすい。検査得点は、検査項目という刺激に対する反応だけを表示するものではなく、検査項目以外のさまざまな心理刺激に対する反応が総合されたものを反映している。本論文では、心理検査使用者が無反省のまま見のがしてきた諸要因を体系的に解明し

ていくことを目的としている。

アメリカの心理学の影響を受けながら、わが国でもさまざまな検査が開発され、標準化されてきた。しかしひとたび標準化された検査は完成されたものとして、多くの人びとが手引書に従って使用してきたし、検査作成者も標準化したのちは、その検査が広く使用されることは願っても、被検者がどのような心理過程をへて検査に答えているのかを明らかにしようとする努力をおこたってきたようである。検査の信頼性や妥当性などについては、伝統的手順にしたがってかなり多くの資料が集められているが、それらの心理検査の基本的属性も得られた得点を中心に統計的処理が加えられているにすぎない。要するにわが国における検査研究は検査を標準化し、それを施行する段階にとどまっているようである。

検査に対する批判は、心理学者の中から、心理学外の人びとからも、ばしばなされている。検査の専門家は、それらの批判に対し、客観的資料を十分にそろえないままに、意見として反論して、検査の長所のみを誇張する傾向が強い。その主要な理由のひとつは、被検者が検査に対しどのような心理的反応をしているのかを明示する知識も資料も十分でない点にある。経験をふんだ検査使用者は、検査者を含む検査場面のあり方や検査に対する被検者の態度などが検査得点に影響することを知っているが、その多くは私的に頭の中にはいっているにすぎない。

本論文では、少なくとも日本の検査界においてなおざりにされてきた側面、すなわち得点となって表現される基礎的資料を提供する被検者の心理を明らかにし、検査得点はいったいなにによって規定されるものであるかを検討し、検査作成者および検査使用者に必要な情報を提供するとともに、検査が有する不備な点について批判考察を行なうものである。

## 2：論文の構成

心理検査には、知能検査や学力検査などを含む最大能力検査と、性格や興味や欲求などを測定する典型的行動検査がある。心理検査には個人的に施行されるものもあれば集団的に施行されるものもある。典型的行動検査には質問紙法形式のものもあれば投影法形式のものもある。本論文では、問題によって、主として扱われる検査の型は多少異なってくるが、全般的には、質問紙法による典型的行動検査とくに性格検査が研究の対象として取り上げられた。

第1章においては、現在の心理検査がもっているさまざまな問題点が取り上げられ、検査の長所短所が指摘された。検査の無批判な乱用を避け、検査をよく知り、人間の特徴を科学的に測定できる方法の開発に向って建設的な態度をとるべきであるという立場から、心理検査へのアプローチがなされた。1960年代のアメリカでは、心理検査に対して、心理学者および専門外の人びとから厳しい批判がなされた。しかしその批判の多くは検査そのものに向けられているというよりはむしろ検査活動（testing）に対するものであった。多くの批判が検査に対する誤解に

もとづくものであることが指摘されるとともに、受けいれなければならない事項も少なくないことが認められた。

能力検査、とくに知能検査に対する主要な誤解は先天的能力が測定されるという考えにもとづくものである。知能検査といえども、先天的能力だけを測定できる道具ではない。多肢選択法形式の能力検査については、作成者側の未熟さと適用のあやまちが指摘された。典型的行動検査ではプライバシー侵害の問題を中心に論述され、検査者の倫理的責任が強調された。心理検査は人にレッテルを貼る道具でもなければ、人の意思決定に必要な唯一のものでもないし、人間に関する資料を集めるひとつの手段にすぎない。第1章の前半は検査の使用法に関する問題点が中心であったが、後半は心理検査の技術的側面の問題が追究された。

検査理論家は統計的処理法に専念するあまり、心理学一般の知識に欠けていて、心理検査で測定されているものが何であるのかという課題をなおざりにしやすい。

質問紙法性格検査の問題点として、(1)検査項目の属性、(2)自己概念、(3)受検態度、これらが回答に及ぼす影響の要点にふれ、投影法検査の問題点として、検査場面と検査者の効果が取り上げられ、これらの心理検査における問題を提起し、第2章以下で述べられることがらの要点を論じた。心理学の中でも、もっとも開発のおくれている性格またはパーソナリティを測定しようとするのであるから、測定道具としてはただ実用的価値があるだけでは不十分である。性格理論の裏づけがなければ、得点の解釈が無責任になる。

心理検査は、それぞれの検査を開発させた文化を背景にしている。性格検査を支えている性格理論もそれぞれの文化を背景にもっている。和製の心理検査が準備されても、その検査の背景にある性格理論が和製でなければ、検査得点は正しく解釈されないばかりか害悪を流す。比較的同じ条件のもとに交差文化的研究の資料を蓄積する必要性が強調された。本論文では、筆者が過去数年にわたって行なってきた交差文化的研究の成果が引用され、理論の展開に役だっている。

第2章では、被検者が検査を受けるときにもつ心理状態のうち(a)動機づけ (b)検査経験 (c)検査不安 (d)失敗の期待が取り上げられた。いずれも検査項目そのものにより生じる心理的反応ではない。検査をどのように認知するかによって、被検者の受検動機が変ってくる。検査場面の認知、測定しようとする道具の認知が得点に影響することが示された。

能力検査には、限度はあるけれども、練習効果や指導効果が働いてくることが明らかにされた。検査に対する賢明度(TW)は人によって異なる。このことは同じ能力をもっていても得点差を生じる原因である。検査に強くなる方法は指導によって与えられるべきである。科学的に解明された原理を被検者に教え、平等な立場に立って真の能力を測定できるように努めるべきであると主張された。性格検査においてもTWが得点に影響しうることが指摘された。しかし、性格検査におけるTWについてはまだ十分に研究がなされていない。性格検査におけるTWが明らかにさ

れることは、検査作成者を慎重にさせるはずである。

性格検査における検査賢明度の研究は第5章で扱われるみせかけ回答がその出発点となっている。わが国ではまだ性格検査のTWは未開発である。

検査不安の研究はわが国でも、いくつか研究がなされている。日米を問わず、検査不安の研究は検査場面の不安状態が検査得点に及ぼす影響よりも不安特性と検査得点との関係をしらべたものが多い。検査場面にストレスがかかると（たとえば評価的色彩の濃い検査場面）、検査不安傾向の高い人ほどその検査得点に影響を受けやすいことは知られているが、検査場面における不安状態がどのような効果をもつかについては十分に研究されていない。9歳児においては一般不安も検査不安もともにアメリカやカナダの子どもよりも日本の子どものほうが低いことが、筆者およびその共同研究者による交差文化的研究により明らかにされた。そのとき利用した不安検査により、学業成績と検査不安との間に負の関係があり、不安の高い生徒と低い生徒とでは、家庭での生活時間の過ごし方が異なる（不安の高い生徒はテレビはよくみるが勉強時間は少ない）ことが見いだされた。このことは学業成績と不安とは直接結びつかないことを示唆するように思われるが、学校での学習とは直接結びつかない知能検査においても、不安の高い生徒は知能検査も低いことが明らかにされているので、勉強時間の不足だけが学業成績不良を導くものではない。検査結果に対する期待が検査得点に影響することが明らかにされている。検査不安の高い者は失敗の期待が強い。失敗の期待は検査得点にネガティブな影響を与える。

このように検査時における被検者の内的世界のあり方は検査得点に影響を与えるのであるから、検査使用者は検査者の心理に関する予備知識を十分にもって検査を施行するように努力しなければならない。

心理検査を使用する場合、検査者自身は、被検者にとって単なる物で、検査場面にある机やいすと同じであるような扱いを受けてきた。しかし心理検査、とくに個人式心理検査は検査者と被検者との対人関係の中で施行されるものである。第3章では検査者が検査場面において、いかに重要な刺激であるかということが示された。検査者の性や年齢が投影法や個人式知能検査の成績に影響する事実が指摘された。しかしアメリカにおける検査者効果の研究にはさまざまな欠陥があることも指摘された。

たとえば個人式検査であるために、検査者および被検者のサンプリングに問題がある。とくに皮膚の色（日本では問題にならない）、性、年齢のような生物社会的要因は被検者によって識別されやすい手がかりである。検査結果には被検者の名前は記入されるが、検査者の性別、年齢ばかりか、ときによるとその名前さえも記入されないことがある。投影法や個人式知能検査の場合は検査者の生物社会的側面は軽視してはならない。研究資料において、検査者変数を軽視することは危険な手続きである。検査に関する論文では、検査者の特徴を明記する必要がある。質問紙法

における検査者効果の研究はほとんどない。筆者は日本版E P P S性格検査を用い、検査者の性と性格には検査得点への影響力がないことを明らかにした。しかし注目されることは検査者の性格と検査場面对する被検者の認知が明らかにされなかった点でそこに問題が残されている。

検査者のもつ性格的な暖かさ冷たさは検査場面の雰囲気に影響を与える。しかし、この場合も被検者が検査者の暖かさをどのように受けとるかによって検査得点への影響力は異なってくる。検査者の地位も検査結果に影響を及ぼすことが報告されているけれども、質問紙について行なった筆者の研究では、検査者の地位効果は見いだされなかった。この場合にも年齢と地位とがかみあっているために、たとえ地位効果が見いだされても年齢の効果であるのか地位の効果であるのかを決定することはむづかしい。

研究用の資料を集めるために、心理学の研究者は、小学校や会社へ出かけて検査を施行することが少なくない。しかしそこで注意をしなければならない点はだれが検査者になるかということである。いくつかの研究は面識のない人が検査者になると、とくに幼児の場合、知能検査の得点が低くなることが知られている。ただ面識があるだけでなく、検査者と被検者とのあいだに好ましい人間関係があると、面識効果はいっそうポジティブになる。質問紙法性格検査においては、このような効果が「どちらでもない」という回答に現われることが知られている。

検査者の経験年数は、検査結果に影響しないようである。ここで問題となることは、検査者は標準の手続きを忠実に踏んでおれば単なる経験回数とは別の要因のほうが検査結果に影響しやすいということである。たとえば好ましい人間関係をつくり出す学習は、単なる経験年数をかさねるだけでは必ずしも実現されない。検査者の行動が検査場面に与える影響のことを忘れてはならない。たとえば検査者が検査結果に対していさ期待は被検者の知能検査の得点を高めることが示されている。どのようにして被検者が検査者の期待をとらえているのか。つまり、被検者は何を手がかりにして検査者の期待を認知するのかという問題が提起される。この問題を解決するひとつの方法は、人の認知の領域で最近話題になっている非言語行動の研究を援用することである。個人式心理検査では検査者と被検者との物理的距離が近い。検査者は言語的行動を抑制することはできても、被検者にとって視覚の手がかりとなりやすい非言語行動は抑制しにくいものである。このような事実から、機械に個人式形式の検査をさせるべきであるという意見もある。しかし検査を機械化した場合、どのような検査者心理が働いてくるかが実証されないままに、そのような試みをするのは好ましくない。

実験心理における実験者効果は、最近の心理学界で注目をあびている新しいテーマであるが、検査者効果は以前から問題にされていながら、方法的にすぐれた技法が見いだされないままに今日にいたっている。報告された論文においても方法上の欠陥が目につく。検査の数とその標本の代表性には疑問があること、実際には変数をコントロールしたつもりでも表裏一体となって他の

条件がつきまとう。ある検査者特性だけを変数として取り上げることはできないほど複雑な構造をもつ人間が検査者であることを無視してはならない。第3章では心理検査の研究には、検査という領域だけにとどまらないで、対人関係の心理、コミュニケーションの心理など、社会心理の知見を援用し、検査の開発にあたらなければならないことが強調された。検査者効果は投影法とか個人式検査のように、密接な対人関係のもとに行なわれる検査にあらわれやすく、質問紙法検査のように構造化された検査にはあらわれにくい。

第4章では客観的といわれる質問紙法心理検査は、実は客観的でないことが論述された。客観的という形容詞は採点法が客観的であるという意味にすぎない。質問紙の質問項目に対する被検者の回答過程はさまざまである。被検者に対する刺激すなわち検査項目は、検査者が意図するような働きをしていない。検査項目が被検者にどのように受けとられているかを明確にしないままに質問紙法検査が使用されてきた点については検査使用者たちは大いに反省しなければならない。被検者の回答過程を調べた研究は日本においてはほとんどなされていない。

しかし、項目のもつあいまいさが回答の変動性をもたらすことは知られている。項目のあいまいさに関する研究は、項目の内容妥当性や検査の評価に役だつことが示唆された。現行の質問紙法性格検査は被検者の自己概念を検査しているといわれる。このことは、性格検査に対する回答の真実性を疑った発言である。

しかし、MMPIのように規準群にもとづいて作成された性格検査では、自己認知の適否は、さして問題にならないという反論がある。規準群にもとづいて選ばれた性格検査は、項目に対する回答をひとつの人間行動とみなしている。この立場にたつと、項目の内容はさして重要な意味をもたなくなる。むしろある尺度に対する反応パターンが重要になってくる。検査項目に無意味の綴字を使用しても、規準群と対照群との識別が可能であることが示唆された。おそらく、非行少年と一般高校生との弁別を目的とするのであれば、無意味綴字を刺激に使用しても、尺度を形成しうるかもしれない。もしこのような過程をへて作成される尺度に一般化の可能性があり妥当性があることも実証されるならば質問紙法と投影法とは互いに歩みよれる糸口を引き出す可能性がある。

質問紙法は回答をごまかしやすいから、検査としての価値がないという批判がある。確かに、みせかけ回答は可能である。しかしどのような条件のもとにおいて、どの程度のみせかけ回答が生じるかについては、多くの心理学者はほとんど常識的な知識しかもっていない。第5章では、みせかけ回答の生じやすい条件とそのような回答の防止策および修正法が取り上げられている。

自分の人間像をよく（あるいは悪く）示そうとする動機が強く生じる場面では、確かにその方向に得点がゆがむ。研究場面においても、教示にしたがってみせかけ回答が可能であるためには、なにを測定しようとする検査なのか、検査の目的が認知されなければならない。検査に関する予

備知識がなくてもみせかけ回答が可能であるのは、検査項目の内容が見とおせるからである。

検査作成者はみせかけ回答を防止するために、強制選択法を考案した。しかし多くの研究が強制選択法においても、みせかけ回答を完全に防止できないことを証明してきた。強制選択法は理論的には防止可能なものかもしれないが、日本版E P P S（強制選択法）の作成者の一員として、筆者は強制選択法に採用される項目を選び出すことは、実際的には非常にむづかしいことを知っている。理論的にみても、集団的に決定された望ましき値と個人のもつ望ましきとは必ずしも同一ではない。もし望ましきと回答とが一致するのであれば、それは個人の望ましきと回答とのあいだに生じるであろう。E P P Sは集団の望ましきにより尺度が構成されている。尺度構成の基礎となった集団のサンプリングの適否も問題になる。

内容の明瞭な項目はみせかけ回答を生じやすいことが明らかにされたので、みせかけ回答の防止策として、内容の微妙な項目を選択することが推奨されたが、内容の微妙な項目は変動性が多く信頼性を低くするという欠陥をもっていることが明らかにされた。また性格検査の項目として内容の微妙な項目を選ぶことは、かなりむづかしい。このような意味において微妙項目の利用は現実性に欠けるところがある。

検査作成者はみせかけ回答を検出するための尺度を考案した。いわゆる虚構（L）尺度はその代表的な例である。しかしL尺度の検出力はきわめて限られていて、性格尺度でみせかけ回答をしてもL尺度には難なく通過できることも証明されている。いくつかの尺度を組み合わせて使用したほうがみせかけ回答の検出力が高まることも明らかにされた。しかしそのようなみせかけ検出指標にも限度があるようである。みせかけ回答が検出できても性格尺度の得点には変わりがない。したがってみせかけ尺度得点の修正が必要になる。修正尺度をもつ代表的な性格検査にMMP1がある。MMP1のK尺度は、よい印象を与えようとした人にも悪い印象を与えようとした人にも利用できるように作成されたけれども、教示により悪くみせかけた人びとの得点にはあまり有効でないことが明らかにされた。

みせかけ回答に対する最大の防止策は尺度項目に改良を加えることよりも、ありのまま答えたほうが被検者自身のためになることを納得させることである。入社試験のような選抜場面における被検者はみせかけ回答をする動機が高いので、そのような場面で質問紙法性格検査を行ない、意思決定することは好ましくない。L尺度はそのような場合、単なる気休めにすぎなくなる。

1960年代の検査界においてもっとも活発な研究が行なわれたのは、応答の構えまたは応答スタイルの問題である。すなわち、項目の内容とは異なったものにもとづいて回答する傾向が取り上げられ、応答傾向は、項目の真の内容による得点変動をゆがめる測定誤差をもたらすと主張する者、応答傾向は測定誤差源であるというよりはむしろ、ひとつのパーソナリティ特性であると主張する者もいる。他方、応答傾向は検査の神話にすぎないといって、この傾向の存在を否定

するものもある。実際にこの話題に関する研究を行なってみると、応答傾向の研究に使用された道具にいくつかの問題点があることと、応答傾向という概念の理論的枠組に難点が潜んでいるようである。しかし検査作成者としては、応答傾向の存在、およびその効果について十分な配慮が必要であることはいうまでもない。

応答傾向に関しては、すでにいくつかの書物において評論され、討論されているので本論文では主として、交差文化的研究をとおして得られた資料にもとづいて論じられた。

いくつかの研究が、日本人とアメリカ人との間に、評定尺度における選択肢の選び方に差があることを指摘している。応答傾向の型のうち、黙従傾向と極端な応答と社会的望ましき回答をとくに取り上げ、研究方法に関する検討を加えた。

### 3：むすび

本論文で扱われたテーマは、日本の心理学者たちがあまり注目しなかった問題であるかもしれない。しかし実際に検査を作成し、検査を使用してみると、ひとつひとつが重要な意味をもっていることに気づく。

心理検査の研究には、検査理論だけでなく、測定される特性の理論的考察、社会心理の知識と技術などを含む総合的な学識を必要とする。検査場面においてなおざりにされていた検査場面における刺激、およびその刺激に対する被検者の反応の心理的意味が明らかにされることによって、検査得点が検査項目内容だけに対する反応を反映していないことが明らかにされた。

取り上げられたテーマは、いまでも論争中のものが多く、筆者もそのつぼの中にまきこまれた感が深い。それだけ、研究方法に問題が多い。そのため本論文では、研究技術の批判に始終したようである。本論文は、1960年代の筆者のテーマをまとめ、新しい1970年代における筆者の研究の基礎を与えるものである。

## 論文審査結果の要旨

近年における心理学の発達、心理検査の面においても極めて目ざましいものがあるが、心理検査は実際には、なお多くの欠陥をもつものである。従来はそうした欠陥に無批判無反省に検査が使用されてきた傾向が著しいが、著者は詳細にその問題点を明かにし、かねてそれを補う方策を求めて、問題領域のうち、心理検査における回答者の心理過程に重点をおいて研究を進めたのである。

第1章「心理検査の問題点」において著者は、まず心理検査に対する従来の批判の重要なものを点検し、多くの検査研究家が統計的処理などの問題に専念する余り、人間心理の根底について



の配慮に欠けるところがあることを指摘する。

第2章では、検査に際しての「被検者の心理」が主題とされ、とくに動機づけ、検査経験、検査不安、失敗の期待などがとりあげられた。その中で検査経験に関しては、指導の効果があることが明かにされ、いわゆる検査に対する「賢明度」を一定の水準に高めることによつて、各被検者を平等の立場において真の能力や性格を測定すべきことが提唱された。検査不安については、日本の児童がアメリカやカナダの児童よりも低いこと、さらに、不安の高い子どもと低い子どもとでは家庭での生活時間の過ごし方が異なること、また検査不安の高い者は失敗の期待が強く、それは検査得点にマイナスの影響を与えることなどが明らかにされた。

第3章では、検査における「検査者の効果」が吟味された。まず、検査者の性、年齢、皮膚の色（人種）など生物・社会的な要因が文献にもとずき点検され、次に、検査者のパーソナリティ特性、地位、検査者の態度、とくに検査者と被検者の面識の有無、検査者の検査結果についての期待等について検討された。質問紙法性格検査については、検査項目の属性、自己概念、みせかけ回答や、応等の構えの問題を中心とする受検態度の回答に及ぼす影響が検討され、投影法検査については、検査場面と検査者の効果の影響が指摘され、さらに、心理検査の研究や使用にあたっては、それを開発させた文化の背景を考慮すべきことが強調された。

第4章「質問紙法心理検査の回答」では、その質問項目に対する回答過程を十分顧慮すべきであることが指摘され、とくに、項目のあいまいさや被検者のもつ自己概念を検討する必要が示唆された。さらにMMP Iのように、各項目に対する回答をひとつの人間行動とみなし、規準群の回答との比較でこれを評価する場合には、項目の内容そのものよりも、当該尺度に対する反応パターンが重要な意義をもつことに着眼して、無意味の綴字や図形を使用して、質問紙法と投影法との融合による新しい検査法の可能性を示した。

第5章では、自己の人間像を実際よりもよく、あるいはわるく示そうとする。「見せかけ回答」が生じやすい条件と、それを防ぐ方策と修正法が検討された。この種の回答が生じやすいのは、自分をよく示そうとかわるく示そうとかいう動機が強く生じる場面であるが、その動機は検査の目的の認知によつて左右される。この種の回答を防止するためには、いくつかの方策が提唱されているが、それらはいずれも多少の弱点をもつものである。この種の回答では一般に社会的望ましさの高い項目が選ばれる傾向があるが、筆者は、MMP Iを実験的に施行して、その臨床尺度のうちには、みせかけ回答の影響を受けやすいものと、うけにくいものがあることを明かにし、社会的望ましさに関して中性である項目がこの種の回答を防ぐに役立つことを確かめた。

みせかけ回答を検出し修正するための方法として、いわゆる虚構（L）尺度や修正尺度も開発されているが、筆者は、多くの実証的資料によつて、これらの尺度の有効性には限界があることを明かにし、むしろ、ありのままの回答の出せる条件を設定することが一層有効であることを提

唱する。

第6章および第7章は、応答傾向の一般的特性とその主要なものが検討された。被検者は、検査においては往々与えられた項目内容に左右されるより、被検者のもつ傾向性によつて回答する傾向が認められるが、その主要なものは、質問に対して「ハイ」と答える黙従傾向と極端な応答傾向、及び社会的望ましさに従つて答える傾向とである。

先ず、黙従傾向については、質問紙法性格検査においては、その傾向は存在するが、質問項目の内容に比較すれば、有力とはいいがたいことを明かにし、むしろ検査場面の重要性を指摘する。

極端な応答の構えについては、内向性・外向性の向性には差はないが、神経症傾向の強いものは、極端な評定をしやすい、大学生では女子の方が男子より著しく極端な判定をすること、日米の大学生の比較では、アメリカ大学生が極端な応答の傾向が大きいことなどが明かにされた。

社会的望ましさの高い項目を選ぶ応答傾向が検査結果の真実性を低めることについては多くの研究があり、それを選ぶ傾向は性格特性を反映するとみる見解もあるが、著者は、この問題では応答の構えや文化的背景を考慮すべきことに着眼して、それに関するいくつかの研究を行なっている。

本論文は心理検査における回答の心理を根本的にしかも詳細に研究し、心理検査の効用と限界を明かにし、かねてその欠陥を補う方法を探求したもので、心理学界に貢献するところが多大である。ただ問題が従来看過されてきた複雑なものであるために、主として批判に力が注がれ、新しい方法の開発は将来の研究に委ねられたところも少くないが、心理学における重要な問題領域を新たに開拓したことは高く評価すべきである。

以上の理由によつて、本論文の提出者は文学博士の学位を授与されるに十分な資格をもつものと認められる。